



国立公園満喫プロジェクトの 先行 8 公園の成果について

阿寒摩周国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

これまでの成果例（１）

アドベンチャートラベル（AT）の推進

- 体験・滞在型旅行であるATを北海道の新たなブランドとして定着させるため、**アドベンチャートラベラーを重要なターゲット**として位置づけた。
- 2016年以降のATWSに関係者が毎回参加し、積極的な誘致の展開により、**ATWS（Adventure Travel World Summit）の2021年北海道開催が内定**

① AT関係者と地域とのネットワーク構築

- 「Adventure EDU」を釧路市で開催（2017年9月）
- AT関係者とのネットワーキングを図る「Adventure Connect」を札幌市で開催（2018年9月）
- AT関係者を招聘し、大型FAMツアー「Adventure Week」を開催（2019年2月）

② ATWSの誘致活動

- 過去のATWS（2016～19年）に参加し、北海道の魅力をPR
- 道知事らを中心に、ATTA会長に対して**ATWS2021の誘致意向を伝達**（2019年6月）



これまでの成果例（２）

国立公園の新たな活用

- これまで**未活用だった国立公園の資源やエリア**について、自然環境の保全も踏まえた新たな活用を積極的に図り、民間等による取り組みを促進
- 阿寒湖畔ボッケ遊歩道を活用した夜のデジタルアートプログラムには、**延べ約3万4千人が参加**（2019年7月～11月）

① 夜のデジタルアートプログラム

- 阿寒湖畔ボッケ遊歩道（特別地域内）を活用し、アイヌの物語から自然との共生の大切さを伝える、夜のデジタルアートプログラム「カムイルミナ」を開始



② トレッキングツアー開始

- 2019年10月より、入山禁止となっていたアトサヌプリにおいて、ガイド付き限定のトレッキングツアーが開始
- エコツーリズム推進法を活用したルールを適用



阿寒摩周国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

これまでの成果例（3）

公共施設の開放等による民間投資の促進

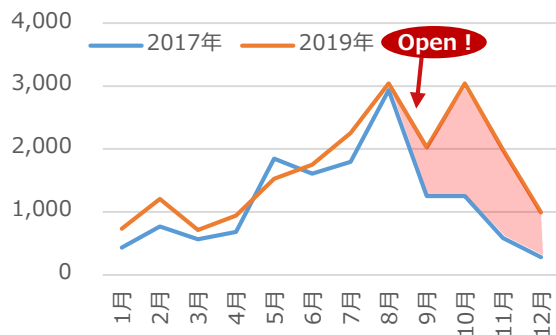
- 公共施設の開放や廃屋撤去等により、地域内外から地域の活性化につながる新たな民間投資を促進
- 川湯エコミュージアムセンター(EMC)で民間カフェが営業を開始し、**利用者数が顕著に増加(対2017年比240%)**
- 和琴野営場では民間事業者と連携してグランピングを試行し、**海外エージェントから次年度のツアー申し込みを獲得**

① VCへの民間カフェ導入

- 川湯EMCの2階に設置したカフェスペースで公募により選定した民間事業者が営業開始（2019年8月～）



川湯エコミュージアムセンター入館者数



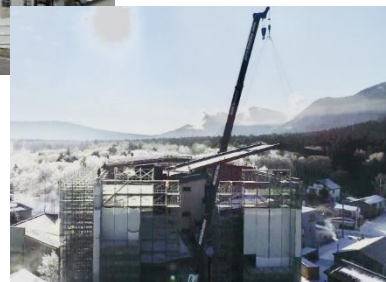
② 廃屋撤去跡地の活用

- 川湯温泉街の廃屋撤去に着手し、地域の民間事業者等による跡地活用を検討中（2019年11月～）



撤去予定の廃屋

撤去工事の様子



※地域による活用イメージ

③ 公設野営場の民間活用

- 和琴野営場にて、民間事業者と連携し、閑散期有効活用策の検討としてグランピングを試行（2018～19年）



- 環境省、北海道、弟子屈町で連携協定を締結し、2020年度より弟子屈町内の公設野営場を民間事業者により一括運営



阿寒摩周国立公園満喫プロジェクト

2019年までの主な取組と成果

● 訪日外国人国立公園利用者数

2015年 6.3万人 (8.9%) → 2016年 5.8万人 (10.2%) → 2017年 5.7万人 (11.2%) → 2018年 5.8万人 (12.7%)

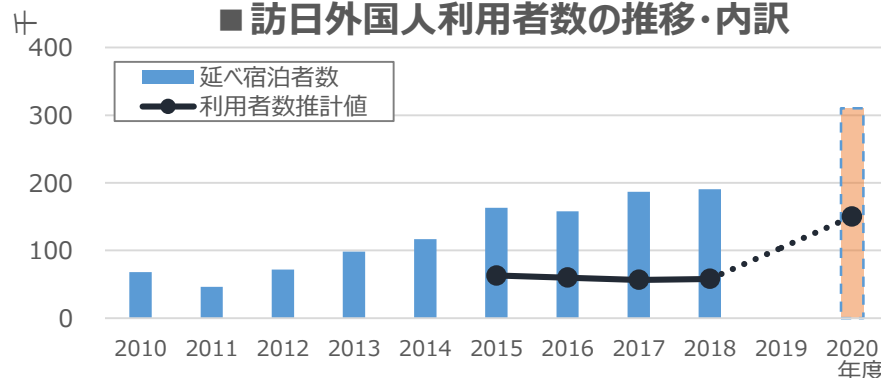
() は標準誤差

※目標値：阿寒摩周国立公園関係市町訪日外国人延べ宿泊者数：31 万人（2020年）

取組による成果・効果

- 道内一体となった取り組みでアドベンチャートラベルの推進を図り、国際会議の誘致に成功
- 公園内の未利用資源・エリアの新たな活用や公共施設の民間開放等に積極的に取り組んだ結果、VCへの民間カフェ導入、野営場の民営化をはじめとした民間投資が進んだ
- 取り組みの成果により、訪日外国人宿泊者数は年々増加傾向
- 特に「アジア」と比較して、「欧米豪」及び「その他」の増加率が高い点が特徴的

訪日外国人利用者数の推移・内訳



	2015年度	2018年度	伸び率
アジア	152,846	168,781	110.4%
欧米豪	6,842	10,391	151.9%
その他	3,572	11,516	322.4%
計	163,260	190,688	116.8%

課題、強化が必要な取組

- ATWS2021の北海道開催を見据え、アドベンチャートラベルを主要なターゲットを定め、消費額の向上、滞在日数の延長等に繋がる取り組みを重点化
- SDGsの推進を踏まえ、アイヌ文化をはじめとした世界に誇る自然との共生の文化を発信する拠点として持続可能な観光地として国立公園のブランド化

強化する主な取り組み

ひがし北海道におけるATの玄関口

知床、釧路湿原との連携等、ひがし北海道におけるATを満喫するための入口としての機能を強化



トレイルネットワークの形成

歩いて長期に滞在する旅行を推進するため、トレイルの整備など移動しながら楽しめるアクティビティの充実等を図る



官民連携による新たな活用の促進

廃屋撤去、公共施設の開放等により民間投資を促進
また、持続可能な仕組みを前提とした官民連携による新たな活用を検討



利用者目線での施設等の改善

多言語化、動線の明確化など、基本的な施設の利用者目線での改善に引き続き対応



十和田八幡平国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

これまでの成果例（１）

十和田八甲田地域での冬季利用の促進

- 世界的に見ても降雪量が多く、良好なパウダースノーで知られる十和田八甲田地域。
- 冬季の楽しみを充実させ、年間を通じた持続可能な観光地の維持が図られた。
- 2017年12月から始めた新たな冬季観光コンテンツによって、十和田市内の冬季宿泊者数が増加。
※2016年度44,529人泊、2017年度60,833人泊、2018年度67,774人泊

奥入瀬氷瀑ツアー（ネイチャーガイドツアー、ナイトツアー）

- 2017年度から開始した冬季観光コンテンツで、冬にしか見ることができない氷瀑などの自然景観をガイド解説付きで堪能できるツアー。
- 日中だけでなく氷瀑などの自然景観をライトで照らす「ナイトツアー」も実施。
- 2018年度からは、十和田湖畔で開催される十和田湖冬物語と連動したツアーも実施（冬物語会場→ナイトツアー→冬物語会場に戻って花火鑑賞ツアー）
※2018年度1,114人、2019年度1,402人の参加者数
※海外からの参加者割合が増加（2.1%が22%）



十和田湖温泉スキー場スノーアクティビティー

- 2017年12月に国立公園隣接のスキー場において、
- 気軽に雪を楽しめるスノーパークを新設。
- 2018年度はスノーイスカレーターを新設し、利用者の利便性向上を図った。

※2018年の利用者数が増加



スノーイスカレーター



十和田湖温泉スキー場スノーパーク

十和田八幡平国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

これまでの成果例（２）

八幡平地域での受入環境の強化

- 「桜と雪の回廊」「ドラゴンアイ」「古くからの湯治場が点在」する八幡平地域。
- 優れた自然や文化を体験できる魅力的なコンテンツの開発を進めることで、外国人の受入れ環境の強化につながった。
- 八幡平見返峠駐車場の利用台数が増加（11月上旬～4月中旬までは冬季閉鎖）。

※2016年24,870台、2017年25,025台、2018年32,944台、2019年37,421台

①八幡平アスピーテライン除雪見学会

- 例年11月上旬～4月中旬まで冬季閉鎖される八幡平アスピーテラインにおいて、2018年3月から除雪作業の一般公開が開始。
- 2019年からは見学会のほか、ガイド付き雪の回廊ウォーキングも開催。



②鏡沼のドラゴンアイ（自然現象）

- 例年5月下旬～6月上旬にかけて、雪が溶けると全体が巨大な竜の目のように見える自然現象。
- 2016年頃からSNSによって拡散、2019年に秋田県公式サイト「八幡平ドラゴンアイ発信局」が開設。
- 5月の駐車場利用台数が年々増加。

※2016年3,623台→2019年9,248台



十和田八幡平国立公園満喫プロジェクト 2019年までの主な取組と成果

●訪日外国人国立公園利用者数(2020年目標 2.1万人)
 2015年 0.7万人 (26.7%) → 2016年 2.2万人 (16.6%) → 2017年 1.9万人 (19.5%) → 2018年 2.9万人 (17.9%)
 ()は標準誤差

十和田湖畔での景観改善

- 13案件のうち、3案件について撤去に向けた訴訟提訴
- 上質化補助金を活用した民間施設の外観改善など



酸ヶ湯グランピング試行

- トレッキングアクティビティ×宿泊のセトで試験的に実施。

※2019/8/30～9/8、15000円/人
 ※3棟で延べ22名の利用



案内誘導の強化

- ビジターセンターにおけるQRコード
- 映像及び標識類の多言語化

利用施設の再整備

- 滞在空間上質化のための園地整備
- 満足度向上のための歩道整備

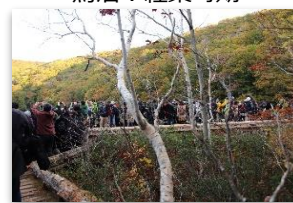
休屋園地



鳶沼歩道



鳶沼：紅葉時期



二次交通の改善

- 2016年から十和田湖～八幡平間の「八郎太郎号」運行

※2016年129人→2019年348人、
 外国人が4人→36人に増加

取組による成果・効果

- ・ 冬季利用の促進や外国人の受入環境の強化などによって、訪日外国人利用者数の目標値を達成。
- ・ 二次交通の改善を目指した観光路線バスや新幹線駅から国立公園利用拠点までのシャトルバス利用者も順調に増加。

課題、強化が必要な取組

- ・ 国立公園コンテンツを利用した北東北三県の広域周遊ルートの充実や外国人受入れ環境の強化を図りつつ、旅行消費額や満足度などの質の向上を図る。
- ・ 主要交通拠点及び観光拠点において、国立公園の案内誘導の充実と多言語対応の促進を図る。

日光国立公園満喫プロジェクト 2019年までの主な取組と成果

●訪日外国人国立公園利用者数(2020年目標 50万人)
 2015年 19万人 (5.1%) → 2016年 24万人 (5.0%) → 2017年 27万人 (5.1%) → 2018年 30万人 (5.5%)
 () は標準誤差

これまでの成果例 (1)

国際観光地 中禅寺湖エリアの復活

- 明治から昭和初期に外交官の別荘が数十軒建設され「夏の日光は外務省のロビーのようだった」と言われた中禅寺湖。
- イタリア／英国の大使館別荘記念公園のさらなる活用とともに、かつての歴史を堪能するための環境整備が進捗。

①大使館別荘記念公園活用促進、船によるアクセス新設

- 大使館別荘記念公園において、コンサート等を実施。
- アメリカの水辺リゾートをモデル1947年に整備されたボートハウスにおいて、英国大使館関係者による貸切ディナーを実施。
- 駐車場から徒歩15分の大館別荘記念公園に船でアクセスできるように東武興業が棧橋を新設(2019年)。施設利用者のうち1～2割が船を利用。



中禅寺湖半ボートハウス



大使館別荘記念公園前棧橋

②日光エリアの案内所連携強化

- 英語対応可能なJNTOカテゴリ2の観光案内所を中禅寺湖畔に新設(2018年)。年間8,500人程度の外国人が利用。



奥日光インフォメーションセンター

③富裕者層向けコンテンツ開発

- 2020年5月のザ・リッツ・カールトン日光開業を見据え、ザ・リッツ・カールトンとともに大使館別荘の専有利用や富裕者向けアクティビティ開発が進行中(栃木県・環境省事業及び関東運輸局事業)。



ザ・リッツ・カールトン日光 パース



イタリア大使館別荘記念公園

④レンタサイクルによる新規アクセス・体験の提供

- 栃木県・県立日光自然博物館が中禅寺湖畔でのレンタサイクルを開始(2017年)。年間約1,500台が利用。中禅寺湖遊覧船への自転車持ち込みについても検討中。



レンタサイクル

日光国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

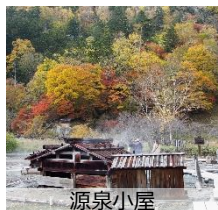
これまでの成果例（２）

湯元温泉の「日光の奥座敷」としての上質化

日光地域の奥に位置する湯元温泉への誘客・滞在時間延長による日光地域全体の活性化を目指し、廃屋の撤去、資金・人材を融資する民間組織の巻き込みを実施し、地域との対話を開始。

① 商業施設誘致と連携した再整備

- 環境省所管地である湯元温泉を日帰温泉・商業施設誘致を含めた再整備するべく、マスタープラン作成に向けた地域対話を実施中。



源泉小屋



温泉組合婦人部との意見交換

② 引き算の景観改善

- 2018年にガソリンスタンドの廃屋を1棟撤去。2020年に土産物屋の廃屋を撤去予定。撤去跡地は①の再整備で活用予定。



撤去前



撤去後

③ 民間からの資金・人材投資の促進

- 地域経済活性化支援機構（REVIC）と地銀が組成する観光遺産産業化ファンドに栃木銀行と足利銀行が出資を決定（2019年）。日光地域を対象として資金とともに、人的資源供与を通じて観光を通じた地域活性化を予定。



これまでの成果例（３）

公共施設の民間開放

飲食店に限られる国立公園の奥地にあるビジターセンターにおいて飲食できるスペースを提供することで、利用者満足度の向上や滞在時間の延長を実現。今後民間視点でキャンプ場を整備し、国立公園核心部への誘客を図る。

① 那須平成の森でのカフェ出店

- 2017年に開始。2019年度は5～10月の開園日の6.5割程度の日数で出店し、利用者の1.5割程度が利用。
- 公園外のカフェ本店舗とのお客の行き来も発生中。
- ガイドウォークと森の中でのカフェを組み合わせたプログラムも試行。



プログラムと合わせた森カフェ（2019年）

② 那須野営場の運営者を交えた再整備

- 運営者・設計者・整備主体を同時に公募する方式で環境省のキャンプ場を再整備するための条件整理を実施。2020年度に公募予定。

③ 湯元VCのくつろぎスペース整備と地元商店の試験出店

- 湯元ビジターセンターに整備したくつろぎスペースにおいて、地元麴屋による試験出店を実施。来館者の1割程度が購入。



くつろぎスペースでの麴屋出店の様子

日光国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

これまでの成果例（４）

「誰が来ても楽しめる国立公園」のためのガイド体制・案内機能強化

国立公園を「日本第一級の自然を誰でも体感できる場所」としてソフト面でブランディングしていくことを目指し、ガイドの質の向上と利用者の属性・滞在時間などに応じた案内機能強化を実施。

①ガイド登録制度の設立

- 日光国立公園で活動するガイドを個人単位で登録する制度を2019年度に設立。登録に必須の研修に130名超のガイドが参加。

②ガイド有志による奥日光ガイドの組織化

- ガイド限定エリアの開拓、ガイドの質の向上などを目的に、民間有志による奥日光のガイド組織が設立。

③ビジターセンターへのアクティビティ紹介デジタルサイネージ新設

- ビジターセンター（日光湯元、那須高原）に90程度のアクティビティを紹介するデジタルサイネージを設置。掲載記事の作成をきっかけとして、鉄道会社などを含めた関係機関でのPR写真素材の共有システムを構築予定。

④日光エリアの案内所における機能及び連携の強化

- **JR日光駅インフォメーションセンター**
奥日光や那須など広範囲なエリアの情報発信を強化（2016年）
- **東武日光駅**
英語対応可能な「日光コンシェルジュ」を配置（2017年）、祈祷室などムスリム対応整備を実施（2018年）
- **中禅寺湖畔**
英語対応可能なJNTOカテゴリー2の観光案内所を新設（2018年）（再掲）

- 東武・JR日光駅、中禅寺湖、湯元などの案内所・ビジターセンタースタッフ間での情報交換会、コンシェルジュ研修を実施（2020年）。エリアとして一体的な案内ができることを目指す。

- ビジターセンター・案内所スタッフが地域のアクティビティを無料体験できる仕組みを構築予定。



日光ビジターセンターデジタルサイネージトップページ

取組による成果・効果

- 2015年と比べ、2018年は利用者数が1.6倍、宿泊者数が1.27倍に（目標達成には伸び率増が必要）
- 民間含め、様々な取り組みが展開され、利用者増、連携強化、体制強化が実現

課題、強化が必要な取組

- 特に宿泊者数が伸び悩み、消費額が他の公園より低い
→ 冬季コンテンツ、夜間と朝のコンテンツ、富裕者向けコンテンツ開発・磨き上げ
→ 設立されたガイド組織を生かしたガイドの質の向上
- 万人に対応できる案内機能が実現できていない
→ 案内機能のさらなる強化

伊勢志摩国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

これまでの成果例（１）

「横山天空カフェテラス」の整備を核とした横山集団施設地区の一体的な魅力向上

横山から望む英虞湾の優れた景観を最大限に活かした、魅力ある利用空間の整備を図り、その魅力を十分に満喫できる上質な時間を提供することで、付加価値の高い新たな魅力を創出

【クルーズ船乗客の誘致】



乗客のガイド

【園地内の他の展望台の再整備】



木もれ日テラス



そよ風テラス

【二次交通の改善】



志摩Maasの実証実験

【多言語化】



みはらし展望台
Miharashi View Point
標識の多言語化（QRコード）

【横山天空カフェテラスの整備】 【民間のカフェの導入／地場産品を活用したメニューの提供】



利用者数が65%増加
滞在時間が増加

【環境保全対策の推進】

プラスチック
削減
RE100

横山VC／カフェ

【情報提供の一元化】

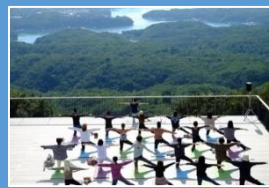


デジタルサイネージ

【イベントの実施】



トワイライトカフェ（ジャズ演奏）



天空ヨガ

【英語ガイドの育成】



英語研修

伊勢志摩国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

これまでの成果例（2）

クルーズ船の乗船客への観光案内

鳥羽港に寄港するクルーズ船の乗船客に対し
伊勢志摩の魅力をPR
(約1.2万人が降船し伊勢志摩を観光)

クルーズ船の寄港実績（2019年）

- ダイヤモンド・プリンセス(6回)
- EUROPA II(1回)

※飛鳥Ⅱ、にっぽん丸などの日本船籍を除く

伊勢志摩の観光案内

- 臨時の観光案内所を随所に設置
- 通訳ボランティアを配置
- Wi-Fi環境の強化
- デジタルサイネージ及び多言語標識を設置

伊勢志摩の観光ガイド等

- 横山展望台への案内及び横山のネイチャーガイド
- 学生ボランティアによる市内の観光施設などへの誘導
- バスの臨時便の運行／フリータクシーの運行



乗船客への観光案内



真珠のアクセサリー作り（横山VC）

これまでの成果例（3）

諸課題に対応した取組の推進体制の確立

地域経済の好循環の拡大に向けた地域が一体となった持続的な取組の推進体制の確立

伊勢志摩国立公園エコツーリズム推進協議会の設置

伊勢志摩国立公園及びその周辺地域において地域づくりなどの実現を目指してエコツーリズムの推進を図る

- 全体構想の策定に向けた検討
- 「インキュベーター事業」による高付加価値のツアー造成など

志摩Maas協議会の設置

近鉄や二次交通の乗車券類のほか、着地型旅行商品の「検索、予約、決済」などのシームレス化を図る

- Webを使った実証実験（R1.10月～11月）
- アプリを使った実証実験（R2.1月～3月）

鳥羽港クルーズ船誘致受入協議会の設置

鳥羽港に寄港するクルーズ船の乗船客を、伊勢志摩各地の観光地に誘客し、地域の消費拡大を図る

- 鳥羽港での観光案内
- ショートツアーの造成



志摩Maasの実証実験



これまでの成果例（4）

海女文化の継承と活用

3000年の歴史を有する海女文化の保存を図るとともにその魅力を世界に発信

海女文化のプロモーション

- ツーリズムEXPOジャパン、商談会などでPR
- パリで海女文化のトークショーを開催
- フランス・ドイツの公共放送「アルテ」が海女の番組「旅への招待」を収録し、EU各国に配信

海女文化の保存・継承

- 国の「重要無形民俗文化財」に指定(H29)
- 「日本遺産」(R1)、「日本農業遺産」(H29)に認定
- ユネスコ「無形文化遺産」の登録に向けた取組の推進
- 「全国海女サミット」の開催（毎年）
- 三重大学が「海女学講座」を開講(H31年度～)

海女体験

「海女小屋」の外国人利用者の増加
(鳥羽市内の海女小屋の例)
・A社：約2.4倍（2015年と2018年の比較）
・B社：約2.2倍（2016年度と2018年度の比較）



海女小屋

伊勢志摩国立公園満喫プロジェクト 2019年までの主な取組と成果

● 訪日外国人国立公園利用者数(2020年目標 10万人)
 2015年 3.3万人 (12.2%) → 2016年 6.1万人 (9.9%) → 2017年 7.6万人 (△9.7%) → 2018年 4.9万人 (13.9%)
 () は標準誤差

訪日外国人利用者の受入環境の改善

- 展望地の利用環境が改善
 - ・「横山天空カフェテラス」の整備を核とした地域の一体的な魅力向上
 - ・その他の展望地の利用環境が向上
- 多言語化が促進
 - ・標識類、パンフレット類、HP等の多言語化
- 交通アクセスが向上
 - ・志摩MaaSの実証実験によりアクセスが改善
 - ・バス路線の延伸
- ツアーコンテンツの質が向上
 - ・ファムトリップの実施により多言語対応が促進
- 情報提供の一元化が促進
 - ・横山VCにおけるツアーの予約システムの導入



効果的なプロモーションの推進

- 旅行博、商談会等において伊勢志摩の魅力をPR
- ファムトリップの実施により旅行業者に伊勢志摩の魅力をPR
- SNSに活用により伊勢志摩の魅力を発信
- クルーズ船の乗船客への観光案内
- フランスをターゲットとした海女文化のPR

持続可能な観光の推進

- 諸課題に対応した取組の推進体制の確立
- 太陽光発電施設の整備の適正化が促進
- 海女文化の継承と活用

取組による成果・効果

- ・ 横山集団施設地区における「横山天空カフェテラス」の整備により、供用開始日の前後 1 年間を比較した結果、同地区の利用者数が65%増加した（H29.8～H30.7とH30.8～H31.7の比較）。また、カフェの導入により、飲食を楽しみながらゆっくりと景観を楽しむ利用が生まれ、滞在時間が増加した。
- ・ また、外国人観光客の利用者数については、上段の統計では前年度大幅に減少しているが、宿泊者数（地方公共団体の統計）は、鳥羽市は約13%増、志摩市においても約3%増と、いずれも増加しており、これまでのプロモーションの成果がみられる。
- ・ その他、全体としては「国立公園訪問者アンケート」（環境省本省）の満足度の調査では、2018年の「大変満足」の割合は前年の44.7%から60.8%に向上し、また「やや満足」から「大変満足」と回答された割合は97.7%と高く、これまでの受入環境の整備の成果がみられる。

課題、強化が必要な取組

- ・ 「受入環境の改善」については、受入環境の基盤となる多言語化、交通アクセスの向上については引き続き取組を進めるとともに、情報提供の一元化については、ツアーの予約の一元化以外はまだ検討段階であり、実現に向けた取組の加速化が必要がある。
- ・ 「プロモーションの推進」については、引き続き従来の様々な手法を活用した幅広いプロモーションを継続していくと同時に、今後はターゲットを絞った効率的なプロモーションも強化していく必要がある。
- ・ 「持続可能な観光の推進」については、魅力資源の長期的な保存と活用を図るため、新たに整備された地域連携の枠組みを維持していくとともに、今後はより幅広い関係者と地域の魅力や価値観を共有し、地域全体で保全と活用の取組を推進していく必要がある。

大山隠岐国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

- 大地の成り立ちを体感できる山・島・海の多彩な自然と、神話・信仰が息づく文化を楽しめる国立公園として、官民で連携して受入環境を充実化し、情報発信を促進。
- 大山隠岐国立公園の外国人利用者数は2015年から2018年で約1.4倍に。（独自調査に基づく推計）



これまでの成果例（１）

大山地域での受入環境の充実化

①官民によるエントランス 3施設のリニューアル

- 国の休憩施設、鳥取県の博物館展示施設、民間施設（ツアーデスク、カフェ、ホテル）を改修、多言語化など機能強化。



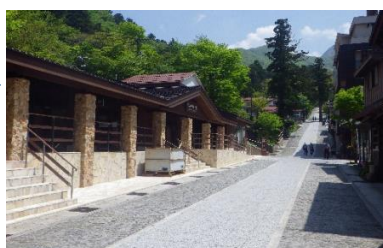
大山ナショナルパークセンター（国）
利用者約12万人／年



ツアーデスク（町）
外国人利用者約1800人／年

②廃屋撤去による景観改善

- 廃屋を撤去しカフェや地域特産品の販売を行う商業施設を整備



③ I T 歩道整備

- 遊歩道を再整備し、対応する自然解説アプリ（日英中韓・野鳥・植物解説等）を開発。2019年は2,674人が遊歩道を利用。



④周遊型定額タクシーの運行

- 訪日客対象。5コースは大山地域の自然景勝地や寺社仏閣を巡る。車両には音声翻訳システムを掲載。



⑤保全と利用の充実化

- 大山頂上の避難小屋や木道を改修中。
- 山中のトイレ不足への対策として携帯トイレを試行的に運用。
- 受益者負担の仕組み（入山協力金等）の導入について検討中。
- 危急時対応が可能な公認の山岳ガイドを養成。



大山隠岐国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

これまでの成果例（２）

多様かつ上質な体験の提供

①ユニークなプログラムの開発

- 大山周辺地域において、オオサンショウウオ保全体験ツアーを造成・販売。料金の一部は保全活動に還元。2019年は外国人約30人が参加。

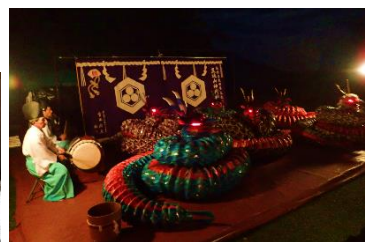


- 水陸両用機で島根半島東部の景観を上空から楽しむ「ジオフライト」を販売。2019年は264名が搭乗。



②グランピングの販売

- 三瓶山地域において、自然、神楽を核とする歴史文化、地元の人との交流を楽しむアクティビティと組み合わせ、グランピングを販売。2019年は外国人42人が利用。



③周遊モデルコースの設定

- メディア向けファムトリップ等での評価を踏まえて、新規コンテンツを組み込み1泊2日～5泊6日のモデルコースを設定し、プロモーションを実施。
- 神話・信仰と結びついた山から海に至るコース、世界ジオパークの隠岐諸島満喫コースなど多彩な内容を用意。

これまでの成果例（３）

周遊促進

- 鳥取県全域と島根県東部の路線バスとローカル鉄道が2,500円で3日間乗り放題になる訪日外国人向け交通パスを試行的に販売開始。
- 島根半島西部地域では、超小型EV車を貸し出す実証事業を実施。2019年は204回の利用実績。



これまでの成果例（４）

在住外国人のネットワークを活用した情報発信等

- 国立公園の国内外への魅力発信を目的に「大山隠岐国立公園国際パークサポーターズ」を組織。15か国30名が登録。
- 外国人モニターとしてコンテンツの磨き上げ等にも貢献。



大山隠岐国立公園満喫プロジェクト 2019年までの主な取組と成果

●訪日外国人国立公園利用者数(2020年目標：2015年の2.5倍)
公園及び周辺地域の外国人宿泊者数を用いた独自調査による推計結果
2015年 2016年 2017年 2018年
10.7万人 → 10.5万人 → 12.6万人 → 14.7万人

これまでの成果例（５）

野営場のサービス向上

- アウトドア・アクティビティの拠点形成を目指し、民間のノウハウを活用しながら、大山地域の下山野営場の再整備を実施中。設計、施工から運営までを一体的に発注するDBO方式を採用。
- グランピングとサイクリングでの周遊を合わせたモデルプランを提示し、蒜山野営場への誘客を促進。



これまでの成果例（６）

ユニバーサルデザインの施設整備

- 環境省直轄で、国立公園の入口標識と多言語の解説看板をそれぞれ計８基設置。
- 隠岐地域において、車椅子用ができるように、ビューポイント２箇所での園路を改修。



取組による成果・効果

ハード： 公共施設では、多言語化、ICT等を活用した内容の充実、トイレ洋式化、バリアフリー化を伴う形で整備・改修が進み、利便性が向上。 民間施設でも、廃屋や空き店舗等を撤去・改修し収益性のある施設への転換が図られた事例が複数あるなど、取組が進展。

ソフト： 官民連携の下で、①広報ツールや口コミ等による認知度向上のための情報発信、②体験型プログラム・ツアー商品の開発、③外国語対応が可能なガイドの養成、④商談会やOTA等を通じての旅行商品の販売促進、⑤交通パスや定額タクシー等のアクセス改善のための取組、⑥保全と利用の好循環の仕組みづくり等が進展。

→ 実感としても外国人観光客が増加し、地域住民の取組への関心も高まった。 地域間連携・官民連携が進行。

課題、強化が必要な取組

課題： 外国人満足度やリピーター率が８公園平均よりも低い。

ハード： 公共施設については、2020年度はVCや標識等の実施中の施設整備の完了に向けて注力が必要。 民間施設については、2021年以降も見据え、廃屋撤去等による景観改善やインバウンド機能向上等の取組を進めていく必要。

ソフト： SUPの下で実施してきたもののうち、特に①体験型プログラムや周辺地域と連携した周遊・滞在型のツアー商品の開発・磨き上げ、②ガイドの養成、③誘客のためのプロモーション、④二次交通の拡充については、2021年以降の展開も見据えながら、2020年度に一層取り組む必要。 寡雪時のプログラム開発、ツアー商品化等を支援するアドバイザーの現地派遣等の追加的なニーズへの対応や、大山隠岐国立公園ならではの独自色の打ち出しも要検討。

阿蘇くじゅう国立公園満喫プロジェクト 主な成果

これまでの成果例（１）

魅力的な草原景観の演出と利用による保全の強化

- ①阿蘇パノラマラインが接続する草千里ヶ浜駐車場の利用者が、約10万人増加（H29：約33万人→H30：約43万人）
- ②牧野組合の草原維持について、観光利用から支援する仕組みを創設（H31：参加者数300人、登録牧野ガイド数：47名）
- ③優れた眺望を確保するため、展望スポットにおいて通景伐採を実施（H28:1箇所、H29:2箇所、H30:4箇所、R1:2箇所）

①景観配慮型牧柵への改修

- H29～30、阿蘇カルデラ・草原を一望できる阿蘇パノラマライン道路沿いを景観配慮型安全柵に改修



草原景観を配慮した安全柵

②農閑期牧野（草原）の観光利用

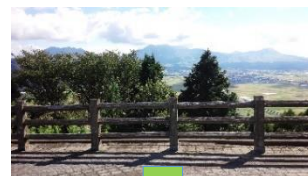
- H31、農閑期の牧野（草原）において登録された限定ガイドによるバイク、トレッキング等のツアーが開始
- ガイド料の一部を草原維持費用に補填



農閑期の牧野をバイクで走行

③展望スポットにおける通景伐採

- 展望スポットの優れた眺望の妨げとなっていた木を伐採



これまでの成果例（２）

利用の開発・拡充

阿蘇くじゅうの自然の魅力を体感する、今までにないアクティビティを開発、公園利用施設を新設

（阿蘇地域アクティビティ事業者数 H28：65事業者→H30：93事業者、H28以降新たに整備された利用施設数（計画含む）18施設）

アクティビティの開発

- 雄大な火山・草原を望み、不整地を踏圧が小さいバギーで疾走する新アクティビティが、誕生。利用者1,800人超



阿蘇山火口広場の拡張

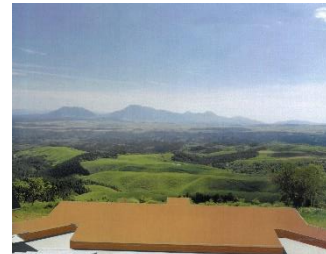
- 火山ガス規制の影響を回避し、より多くの利用を促すため、阿蘇火口見学広場の拡張を、景観配慮し最小限の規模で計画。R2年度に整備予定



火口見学広場の拡張計画図

大草原の音楽舞台の整備

- 世界的に有名な和太鼓アーティスト「DRUM TAO」が管理運営に携わる舞台・休憩施設を既存事業地に整備。R2年度に完成予定



天空の音楽舞台（イメージ）

阿蘇くじゅう国立公園満喫プロジェクト 主な成果

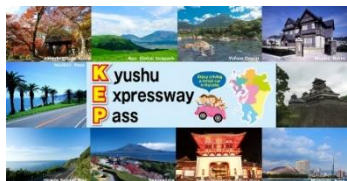
これまでの成果例（３）

利用環境の改善・向上

- ①九州における訪日外国人レンタカー利用件数が、前年比35%増（H28：19,726件→H29：26,683件（35%増））
- ②多言語対応の取組が推進（訪日外国人対応のための研修の受講ガイド数（熊本県） H30：16名、R1：16名）
- ③公共の利用施設の改善（H28以降にインバウンド対策として改修等した公共の利用施設数（計画含む）100施設以上）

①交通の利便性向上

- マップコード付きガイドマップの配布
- 九州地方整備局、NEXCO西日本との連携（道の駅ゆふいん国立公園ブース設置、高速道路乗り放題等）



九州高速道路の乗り放題パス

②多言語対応の推進

- 観光庁事業ネイティブテキストの活用（VC展示、ガイドマニュアル）
- 英表記の登山マップ製作及びアプリによる普及
- 多言語対応ガイド育成



外国人へのガイド実習

③利用施設のインバウンド対策

- サイクリング・マラソン等が安全かつ景観を堪能できるやまなみハイウェイの拡幅
- 南阿蘇VC等利用拠点のWiFi整備
- 民間の観光施設等を支援するくまもとフリーWiFi整備事業補助金の実施
- 大観峰等利用拠点のトイレ洋式化



やまなみハイウェイ拡幅（赤レーン）

これまでの成果例（４）

熊本地震等からの創造的復興

熊本地震、阿蘇中岳大規模噴火による被災からの復旧・復興が推進（H28年以降に復旧した利用施設数 13施設）

被災からの復旧

復旧した熊本と阿蘇を結ぶ長陽大橋



復旧した草千里展望台



- 利用拠点に繋がる道路、展望台・歩道等の利用施設が復旧、利用環境が回復

被災を教訓に将来に繋ぐ取組



- 今後の噴火監視の一助となる火口カメラ設置
- 防災教育に活用できる阿蘇山上ビジターセンターの整備



- 被災のすさまじさを後世に伝える東海大学震災遺構施設の整備

阿蘇くじゅう国立公園満喫プロジェクト 2019年までの主な取組と成果

● 訪日外国人国立公園利用者数(2020年目標 140万人)
 2015年 2016年 2017年 2018年
 68万人 → 68万人 → 93万人 → 103万人
 (2.7%) (2.9%) (2.7%) (3.0%)
 ()は標準誤差

① 阿蘇くじゅう国立公園をデスティネーションとするプロモーション

- 九州の外国人入国者数が、140万人増加
 (H28: 372万人→H29: 494万人→H30: 512万人)

阿蘇くじゅう旅番組の海外放送

- 大分地元メディアと連携し、ラグビーWC前に誘客を狙った阿蘇くじゅう旅番組を豪・Nzで放送



海外放送した番組 (イメージ)

香港プロモーション

- アジアマーケットの安定的な確保を狙って、ハブ都市の香港で海外旅行業者を招聘したプロモーションイベントを展開



香港プロモーションの様子

SNS等を活用した海外広報

欧米向け広報戦略動画



- 阿蘇くじゅうアクティビティ等をストーリーで紹介する広報動画を製作。JNTOのHP掲載、配信
- 欧米豪に向けFacebook, Instagram, YouTubeに広告配信 (視聴回数約56万回)

② キャッシュレス化の推進

- 阿蘇地域アクティビティ事業者キャッシュレス率の上昇
 (H28: 1%→H30: 23%)

- 地元銀行と連携し、クレジットカード普及を推進
- 阿蘇観光連盟により観光、旅館、飲食事業者向けにカード決済の講習会を開催



③ 民間・関係機関等との連携

- 九州で事業展開しているオフィシャルパートナー、現地観光業の連絡会議を開催
- 九州地方整備局等との連携協定の締結
- 国立公園の地域資源を活用した経済活性化を図る協定を地元4銀行と締結

九州OP連絡会議



取組による成果・効果

- 訪日外国人利用者数の増加 (H27: 68万人→H30: 103万人)
- H30の外国人延べ宿泊客数の都道府県順位が高位に
 (延べ宿泊客数: 熊本県23位、大分県25位に対し、外国人延べ宿泊客数: 熊本県17位、大分県14位)
- 関係者や関係機関との連携がとれ、一体的な取組体制を構築

課題、強化が必要な取組

- 訪日外国人数の国別偏りの解消: 韓国等東アジア市場が80%超を占め、同市場の社会情勢が大きく影響
 →欧米豪は継続しつつ、インドネシア等他のアジア市場へのプロモーションを強化
- オーバーユース対策: 交通網の回復に伴い訪問者の大幅に増加見込。交通渋滞等の利用過多が懸念
 →ライド&パークの推進、公共交通機関の充実

霧島錦江湾国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

これまでの成果例（１）

佐多・指宿地域の活性化・周遊

● 佐多岬の利用者数が約3倍（※１）、雄川の滝は約４倍（※２）に

※１：2016年 4.2万人⇒2019年 11.8万人 ※２：2016年 月平均25百人⇒2019年 月平均100百人

- 自然景観そのものを中心に、一体的な利用環境を造成
- 条件不利地・地方への誘導、周遊ルートの確立（母都市である指宿側との連携）

①雄川の滝の整備

- 鹿児島県・南大隅町が雄川の滝展望デッキ・遊歩道・駐車場・トイレを整備
- 歩道入り口に地元産果物を使ったカフェ・売店を整備
- 2018年8月、国立公園に編入
- 近隣の空中テント泊利用者向けに清流を眺めながらの朝食提供



③アクセス改善

- 南大隅町が指宿港からの高速船と連携した佐多岬・雄川の滝等を巡る周遊バス（ガイド同乗）を2018年から運行開始。H30年度利用者数約1,400人
- 2019年度以降、地元バス会社が民営
- 指宿で宿泊し佐多地区を巡る旅行形態を新設

②佐多岬の整備

- 環境省・鹿児島県・南大隅町が連携して、展望台・公園エントランスなどを一体的に整備
- 展望ポイントでの通景伐採を徹底
- 多言語解説の整備、WI-FI設置
- 2019年3月、佐多岬グランドオープン
- 展望台までの歩道のユニバーサルデザインに配慮し、介助者付き車椅子が通行可能。電動アシスト付き車椅子の貸出実績100人超。



霧島錦江湾国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

これまでの成果例（２）

霧島地域の魅力向上と二次交通改善

● 霧島の自然を活かした新たなコンテンツ・景観を提供し、新たなバスが運行

- 取組前にはなかったロングトレイル、SUP等の新たなコンテンツを検討・整備し、新たな魅力を構築
- 新たな展望台の整備、通景伐採により、霧島の新たな景観、より美しい景観を提供
- 取組前からの課題だった二次交通改善に向けて、2つの観光バスが実証運行

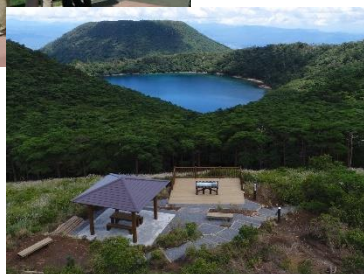
①展望の整備

- 2つの火口湖を一望できる二湖パノラマ展望台にウッドデッキと四阿を再整備
- 加久藤カルデラを一望できる白鳥展望台を新たに整備
- ノカイドウ等が展望できるえびの高原つつじヶ丘の園路整備
- えびの高原、白鳥温泉上の県道脇、御池における通景伐採

白鳥展望台



二湖パノラマ展望台



②コンテンツの造成

- 地元観光団体が霧島連山を欧米からニーズの高いロングトレイル5日間のコース案を策定
- 複数の火山湖を活かし、新たに湖面を楽しめるSUP等の体験メニューを導入
- 霧島神宮参拝や高千穂峰登山道における多言語音声ガイド導入
- グランピングの試行的実施

SUP
@白紫池



ロングトレイル
コース案



③二次交通改善

- 霧島市による主要観光地を巡る周遊する観光バスが運行開始
- 国土交通省事業を活用し、鹿児島空港～えびのの間で観光コンテンツと組み合わせた実証バスを運行したことで、二次交通改善に向けた課題と対策を把握

実証バス



実証バス
ルート



霧島錦江湾国立公園満喫プロジェクト 2019年までの主な取組と成果

●訪日外国人国立公園利用者数(2020年目標 20万人)
 2015年 2016年 2017年 2018年
 7.1万人 → 7.9万人 → 12.9万人 → 14.2万人
 (8.3%) (8.7%) (7.4%) (8.1%)
 ()は標準誤差

①体験メニューの充実

- ファムトリップによるインバウンド向けの魅力・課題の抽出と民間事業者ワーキング会議による利用と保全の好循環を図る滞在型プログラムを造成
例) シカの夜間調査ツアー、クロツラヘラサギの調査ツアー
- 池田湖、重富海岸等でのSUP導入など、火口湖・海のアクティビティを開発・充実
- 自然をさらに深く体験できるように、ガイド人材・団体等の養成・充実



②利用環境改善

- 重富なぎさミュージアム、鰻池周辺の駐車場整備により大型バスが立ち寄り可能に
- えびの高原キャンプ場ケビン等の改修により利用率向上
- 各利用拠点でWi-Fi設置し、より情報にアクセスしやすく
- 各利用拠点、各コンテンツの場所において看板・パンフレット等を多言語化
- 大浪池の多言語解説や噴石からの一時避難等の機能を備えた休憩所を整備中

③展望の改善

- 開聞岳登山道の乱立看板を統一し、景観改善

④プロモーション

- 国立公園フォトコンテスト・インスタミート等の開催



- 九州地区ビジネスマッチング情報交換会に参加
- 国立公園管理事務所の設置・所長就任によるメディア露出

取組による成果・効果

- 条件不利地である佐多岬、雄川の滝等の利用環境を整備することで、利用者が3～4倍に増加。
- 鹿児島市街地からアクセスしやすい桜島のフェリーターミナルに近い桜島ビジターセンターにおいて、外国人利用者数が約1.6倍に増加。(2016年：約30千人⇒2019年約49千人)
- 利用環境の改善、新たなコンテンツの造成、多言語化などにより、公園全体で利用者数が2倍に増加し、満足度も増加。

課題、強化が必要な取組

- 火山活動の影響による主要道路閉鎖もあり、霧島地域の二次交通改善が途上。
- また霧島地域のグランピングなど、新たなコンテンツの一部は商品化の途上。
- そのため二次交通の改善とコンテンツ造成等による魅力向上の双方が好循環がはかれるよう、強化が必要。

慶良間諸島国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

これまでの成果例（１）

リトリートのための受入環境の充実・強化

- 「さんごゆんたく館」の整備により、国内外からの幅広い利用者に公園情報の案内、サンゴ礁保全の普及啓発が可能に
- 新たにリトリート空間として整備した「ニシバマテラス」により、快適なビーチの滞在利用が可能に
- 利用拠点施設やビューポイントにおける多言語対応の充実、外国人スタッフ等の配置により、受け入れ体制を強化

①「さんごゆんたく館」における公園サービスの提供

- 来訪者への公園情報の提供、サンゴ礁保全の普及啓発、地域との交流を担う拠点施設として、トータルな公園サービスの提供が可能に。
- 慶良間の美しさを紹介する映像ソフトが外国人利用者から高評価。
- 2019年の来館者は、主なターゲットとする欧米系利用者で1,340人（日本人9,153人、アジア系672人）。



館内の様子



さんごゆんたく館

②「ニシバマテラス」におけるリトリート空間の確保

- ビーチ利用、休憩、展望等のそれぞれの利用形態に応じた受入環境が整うことで、ビューポイントとしての魅力が高まり、リトリート利用が可能に。
- SNS上で多くの利用者がビーチ利用の魅力に関する情報を発信。



2階のテラス席



ニシバマテラス

③きめ細かな情報サービス・プログラムの提供

- さんごゆんたく館等の利用拠点施設において、多言語解説を充実させ、National Park Wi-Fiを導入。公園情報を得やすい環境づくりを進めた。
- 各港の観光案内所等で、外国人スタッフやデジタルサイネージによる多言語対応を実施。
- 冬季プログラムの強化やガイドの育成に向け、モニターツアーや勉強会の実施、アクティビティ事業者の活動実態を把握。



座間味港観光案内所



デジタルサイネージ（泊港）

慶良間諸島国立公園満喫プロジェクト 主な成果例

これまでの成果例（２）

環境協力税の新たな導入及びサンゴ礁保全のための地域活動の推進

- 座間味村において2018年度に導入（渡嘉敷村は2011年度に導入済み）した環境協力税を活用し、ビーチ等における環境美化を促進
- 移動中の船舶内において、サンゴ礁の保全ルールを周知する映像ソフトの放映し、普及啓発を強化
- さんごゆんたく館において、子ども向け・一般向けの普及啓発イベントを積極的に実施

①環境協力税を活用した環境保全活動の促進

- 環境協力税（2018年度税込：渡嘉敷村約1,300万円、座間味村約1,000万円）の導入・活用により、漂着ゴミの処理等の環境美化・環境保全活動がより安定的に進められるようになった。



ビーチクリーン活動



アオウミガメ

②サンゴ礁の保全ルールの設定・普及啓発の推進

- 各島のビーチにおいて、サンゴ礁保全のための遊泳区域や自主ルールの新たな設定が進められた。
- 移動中の船舶内でサンゴ礁保全を多言語で周知する映像を放映し普及啓発を強化した。
- 多言語解説等整備事業により、サンゴ礁の保全ルールに関する解説文を作成し、普及啓発を促進した。



船内映像



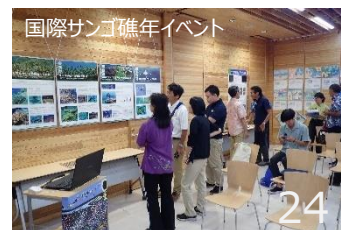
保全ルールの多言語周知

③さんごゆんたく館における自然学習の実施

- さんごゆんたく館が開館したことにより、サンゴ礁保全の普及啓発につながる自然学習や各種交流イベント等を積極的に実施できるようになった。



サンゴ学習



慶良間諸島国立公園満喫プロジェクト 2019年までの主な取組と成果

● 訪日外国人国立公園利用者数(2020年目標 3.8万人)
【冬季の入域者数(11～3月)(2020年目標 6.7万人)】

	2016年	2017年	2018年
	4.1万人	4.3万人	3.5万人
	【4.6万人】	【4.6万人】	【4.5万人】

① 国立公園の基盤施設の民間活用による管理運営体制づくり

- 2020年度に整備予定の座間味ビジターセンター（仮称）において、民間を活用したカフェ等の収益事業を基にした管理運営体制の構築に向けて、施設設計及び地元調整を進めた。

ビジターセンターの整備イメージ



② ビューポイント等における多言語サイン等の再整備

- 各島のビューポイント等において、多言語による案内、解説、誘導サインの整備を行い、併せてトイレの洋式化を進め、来訪者の満足度向上を図った。

多言語サインの再整備



③ 電子決済システムの導入

- 座間味村の各事業者施設においてカード決済サービスが導入されたことで、来訪者の利便性向上が図られた。
- 渡嘉敷村の乗船券売り場において、乗船券のインターネット予約、カード決済が可能となり、来訪者の利便性向上が図られた。

カード決済システムの導入



取組による成果・効果

- ・ 快適なリゾート空間の確保に向け基盤整備を行った「さんごゆんたく館」や「ニシバマテラス」等におけるサービス提供、案内サイン等の多言語対応を通じて、魅力ある地域資源の活用と自然環境の保全を両立させる「良質な旅」の実現が図られてきている。
- ・ 本公園の本質的な価値であるサンゴ礁を中心とした「ケラマブルーの世界」を守るため、「環境協力税」の導入をはじめとした様々な取組が各主体により行われ、地域と来訪者が協力し守る地域づくりが進められてきている。「リゾートの実現」と「サンゴ礁の保全」の両立を支える基盤施設として整備を進めている座間味島のビジターセンターにおいて、民間活用によるカフェ・物販事業の収益を活用した管理運営の仕組みづくりを進めている。

課題、強化が必要な取組

- ・ リゾートのための利用者のニーズに応じたきめ細かな公園サービス（情報提供、コンテンツ、普及啓発等）の提供。
- ・ サンゴ礁の保全・活用に対するより一層の普及啓発、来訪者の理解や共感を元とした地域全体で守る仕組みづくり。
- ・ 多言語対応媒体の一層の充実化とともに、陸域を活用した体験メニューの磨き上げと浸透化、プロモーション強化。
- ・ 宿泊施設、アクティビティ等のウェブ予約システムの対応強化、最新かつ正確なオンライン情報の確保。
- ・ 座間味ビジターセンター（仮称）における民間活用による収益事業を核とした管理運営体制の構築。